

あの日を 背負って

明石歩道橋事故20年

上

生後2カ月、犠牲者に救われた 山下 翔馬さん(20)

った。

すぐそばには、自分と一緒に搬送された男の子の名前を泣きながら呼び続ける母親がいた。自らもけを負った佳奈さんは白い天井を見つめながら、「翔馬のこと、素直に喜べなかった」と話す。

助かった経緯を聞いたのは取材を受けた記者から。事故で亡くなった草替律子さん(当時71)が人波に押しつぶされそうなベビーカーから翔馬さんを抱き上げ、近くの人に手渡して力尽きたと。

事故の後、わが子のおなかにできたあざに心が痛んだ。「生後間もない赤ちゃんを連れて行くななんて」これだから若い母親は」と責められた。律子さんの夫、

生かされた命 ありがとう



身をていして命を救ってくれた草替律子さんの名前が刻まれる慰霊碑を見つめる山下翔馬さん(右)と母の佳奈さん＝14日夜、明石市大蔵海岸通1、朝霧歩道橋(撮影・秋山亮太)

与一郎さん(2015年に死去)が会いたがっている。聞いても、「大事な人を奪った自分がどんな顔をすれば」と気が重かった。

対面した与一郎さんは「生きていてくれただけで

十分」と笑顔で言葉を掛けてくれた。「ありがとう」と返すのが精いっぱいだった佳奈さんの、ぎゅっとなっていた心はほぐれた。事故後の10年間、律子さんの命日は歩

道橋で一緒に手を合わせた。

翔馬さんにとっても「メロンをくれるおじいちゃん」との再会は楽しみだった。写真の「おばあちゃん」の話は初めて聞いたのは小学5年の時。「自分は死んでいたかもしれない」と考えたことを覚えている。

中学生になると、生まれてばかりのまだ首が据わらない妹を抱っこした。律子さんから幾人もの手を渡ったという自分を想像した。「大事に扱ってもらったんやな」。記憶にないはずのぬくもりを確かに感じた。

事故に遭ったことは周囲に隠さない。「おばあちゃん命と引き換えに僕はここにいる」。生かしてもらった感謝の気持ちがあるから素直に思える。

知人の紹介で大工に弟子入りした。「何でもないように緻密な仕事をする」という親方のようなのが夢だ。

あの日からもう20年。最近、亡くなった与一郎さんが、同じ建設の仕事をしていたことを知った。

今年の21日は、仕事帰りに作業着姿で母と一緒に花を手向けに行く。「助けてくれたおばあちゃんと、優しく包んでくれたおじいちゃん」に、元気に生きていく姿を見てもうために。

(小西隆久)

花火大会に訪れた子どもら11人が亡くなり、247人が負傷した2001年7月の明石歩道橋事故から21日で20年となる。居合わせた人たちが事故と向き合い続けた歳月を見つめる。

あの日を

背負って

明石歩道橋事故20年

大好きなサッカー。けれど、左足ではボールを思い切り蹴れない。

明石市の小学校教諭梶原将裕さん(32)は、歩道橋事故で左足の靭帯を損傷した。その後遺症で足首を固定できない。

そして今も、けがをしていないはずの「右足」が痛むことがあるという。

あの日、小学6年生だった梶原さんは花火大会の会場に向かう歩道橋を渡っていた。一緒にいた妹が途中、同級生の有馬千晴さん(11)当

小6で遭遇し負傷、今は教員に 梶原 将裕さん(32)

——中

時(9)と小さく手を振り合い、はにかむ。弟の大きな(7)と2人で大人たちの影に消えた。

次第に人の流れが止まり、密集度が増していく。突然、大人たちが揺れ始めた。「戻れ」「下がれ」。

手すりの外側であおむけに倒れた瞬間、歩道橋の壁と人の体にこめかみを挟まれた。誰かに絡まった左足が人の重みで外側にねじれていく。自分では止められない。体の中で「ポキッ」という音が聞こえた。

どれくらいそうしていたのだろう。体の上にいた男児を抱え上げられた。起き上がると、周囲には脱げたサンダルやタオルが散乱。ふと気付くと、右足の下にベビー服があった。小さな赤ちゃんだった。頭の下に

胸の重し、話せなかった

は血だまり。運ばれていくのをぼうぜんと見つめた。

翌朝、母親から有馬さんの姉弟が亡くなったことを聞いた。生後5カ月の赤ちゃんが犠牲になったことも。「僕も死んでいたかも」。

初めて実感した。研究者を志していた高校3年の2学期。理系教員の減少を報じる新聞記事を読み「先生もいいかな」と興味を持った。「優しいから向いてるね」と背中を押され、小学校教員を目指した。



歩道橋事故の後遺症が左足に残る梶原将裕さん。大好きだったサッカーも社会人になるまではできずにいた(8日午後、明石市大蔵海岸通1(撮影・鈴木雅之))

ただ、周囲からは「氣を使いきりて疲れないの?」とよく聞かれる。素の自分を出し切れない何か、胸の奥に挟まっている。

小学校の教壇に立つてもうすぐ9年。同僚や教え子に、歩道橋事故の体験を自ら打ち明けたことはない。

右足のうずきは、自分が赤ちゃんを圧迫したのではないかという罪悪感。生かされた命の重み。複雑に入り交じって整理が付かず、胸の中の重しとして残ったままだ。

小学校生活で、子どもたちが口にする「死ぬ」という言葉に「簡単に言える言葉じゃない」とつい語調がきつくなることもある。

そろそろ話す時かもしれない。そう思うようになった自分に、改めて流れた歳月の長さを実感している。

(小西隆久、有富晴貴)

あの日を

背負って

明石歩道橋事故20年

リビングの窓から明石海峡大橋が一望できる。あの歩道橋もだ。

明石市の責任者として有罪判決を受けた元市民経済部長の男性(78)は事故の翌年、市外から今のマンションに移り住んだ。

4年前に脳梗塞で倒れて体が不自由になり、現場に足を運べない。元部長は事故から丸20年となった21日、自宅のベランダから歩道橋に体を向けた。「事故を一生背負っていく」。1人、そっと手を合わせた。大蔵海岸は、開発部長として整備に携わり、思い入

警備責任問われ有罪判決を受けた 明石市の元幹部職員2人

——下

れは深い。事故前年の2000年の春、市の市民生活部と経済部が統合され、初代部長に就任。花火大会と市民夏まつりを統括する立場だった。

補佐する次長が置かれ、まつりへの関与は薄まった。警察との警備計画の協議は一度も出席しなかった。ただ、素案にあった「自主警備」の文言が引っかけた。雑踏警備は主催者側の自主警備を原則とする。警察に削除を求めるよう部下に指示したが、「これを書かないと花火の許可が下りない」との返答だった。

結局、元部長が折れた。「どうしてあの文言をもっと問題視しなかったのか。後悔してもしきれない」。病後、なかなか出てこない言葉を絞り出す。あの日、商工観光課長だ

消えぬ罪、生涯かけ償う



誰もいない歩道橋で慰霊碑に手を合わせる明石市の元商工観光課長の男性＝21日午前、明石市大蔵海岸通1、朝霧歩道橋

った男性(69)は、歩道橋から運び出される負傷者に事態の重大さを察した。意識のない高齢女性ら2人の人工呼吸を手伝ったが、息を吹き返したのかどうか。

元部長も、露店の明かりが消えた会場で、息をしないう子どもの名前を泣き叫ぶ母親の声が耳に残っていた。2人は市幹部として遺族

に謝罪して回った。悲痛な訴えに胸が押しつぶされるようだった。

刑事裁判で元部長や元課長ら5人が在宅起訴され、一番は有罪判決。元部長は今も「自分をトップとする構図で、市の責任や事故の原因が全て明らかにされたのか」との疑念が消えない。

2人は大阪高裁に控訴。元課長は「反感は分かっていたが、市が適切にしていたとまで否定された」と目を伏せる。臨んだ控訴審でも再び有罪判決が下った。弁護士に強く勧められたが、2人は上告は断念する。「どこまでいっても、主催者の責任は免れられない」

毎夏、並んで歩道橋で花を手向けた。執行猶予期間を終えた時も足を運んだ。「多くの人生を変えてしまった罪は一生消えない」21日。許されることのない、謝罪の気持ちを今年も伝えた。(小西隆久)